

David E. Hoffman, *The Oligarchs
Wealth and Power
in the New Russia.* NY. 2002.

中山 弘正

Oligarchy は寡頭政治、 Oligarch はその1人を意味するので、直訳すると「寡頭政治の人々」とか「面々」ということになる。ソ連邦崩壊後の「新ロシア」の「富と権力」というサブタイトルで、その意味は明らかである⁽¹⁾。

半世紀以上にわたって、「市場」を拒否し「計画経済」を国是とし、私立商業銀行も株式も小切手も手形も、そもそも私有財産制も資本家階級も地主階級も否定してきたソビエト社会主义共和国連邦が崩壊し、再資本主義化、市場移行が行われるという驚くべき事態がここ10年余の世界経済の焦点の1つであった。共産党独裁政治を残すとはいえ、これより10年以上前から改革開放路線をとり市場移行を進めてきた中国も併せて考えると、むしろ、現代の世界経済の最大の焦点というべきかもしれない。

それゆえに、「新ロシア」、ロシア連邦の研究は相当な量に及び、筆者自身でさえもすでに多少の論稿を公表してきた⁽²⁾。この領域の諸研究、諸報告はすでに「山をなす」といっても過言ではない。そして、それらの中で、新たに（或いは再び）作り出された「資本家階級」とか「経営者」たちが、国営企業の民営化などとともに如何に形成されて

きたかという分野に限っても、関連文献はすでに山を築いているといわねばならない⁽³⁾。

しかし、新たな資本家階級や経営者層の形成といっても、とくにわが国での研究の多くは、国営企業の株式会社化の経過やその細かい分類などを集中していて、なかなか生きた資本家像といったものに迫っていないという難点があったのではないかろうか。その点、本書は、そうした全般的な市場移行の背後の政治権力の中心近くで躍動した「新興財閥」のリーダーたちの生ま生ましい動きと闘いを追跡したものとして、「ロシア再資本主義化」——岩田昌征氏の表現によれば「階級形成闘争」——の発展が容易ならざるものであり、また激動とドラマとに満ちたものであったことを明らかにしたことで、一頭地を抜くものといえるであろう。

さて、本書は大きく2部に分けられている。第一部は Oligarchs の1人1人について、彼らがソビエト体制の中でどのような状況下に生き、新しい社会に向かって何をどう把んでいったのかを明らかにしようとしたものである。7章のうち、最初の「影と不足」を除けば、6章はスモレン斯基、

ルシコフ、チュバイス、ハダルコフスキイ、ベレゾフスキイ、グシンスキイという6人の、いわば小伝記である。第2部の9章は、これら6人が、ロシア連邦の大統領、すなわち政治権力者及びその大統領府とどうかかわったのか、という全体劇の展開の追跡である。第1部で紹介された1人1人が、第2部では一齊に登場し、いわば活劇が総合的に時とともに展開していくのである。

第1章は短いが鋭い著者のソビエト経済の総括といえる。アダム・ミクス流の選択と競争の市場経済を拒否したロシアマルクシストは、権力は取ったが経済実体はそもそも資本主義を十分経験もしていなかった。そこから来た歪み。それは1980年代半ば頃にはもう隠しておけなくなった、とペレストロイカを見る。

スモレンスキイは聖書印刷の問題などで逮捕され、監獄建設労役に処せられたりした経験があるが、協同組合銀行を手はじめに銀行業で力をのぼし、公金も扱うようになる。

ルシコフは1936年生まれで石油・ガス単科大学——旧ソ連では大学では産業部門別カレッジが普通であった——を1958年卒業している(p.58-59)。企業界・モスクワの市政で活動していたが、そこで「資本主義の最初のパイ」が焼かれるのを監督する(p.61)、つまり、行政面から市場経済化にかかわった。彼はあるとき公の席で「あなたはデモクラットかコムニストか」と聞かれ、「私はハジャーイストヴェンニク（ロシア語でハジャーインは家を切り盛りする家長、主人）だ」と答え、ラジカル派の追及をかわしたという(p.72-73)。1991年8月のプッチ（クーデタ）のときも裏方で、ひそかにモスクワ市の電話やラジオを開いたままにしてエリツィン派を助けた。1992年6月、ポポフ市長辞任後モスクワ市長として一貫して建設をはじめ市民生活を切り盛りしている。

チュバイスはレニングラード（現サンクトペテルブルク）で大学生活をし、同市の行政も経験しているが、チェコ事件（1968年）でソビエト体制に見切りをつけた(p.84)。コルナイ（ハンガリー）の『不足の経済学』の影響も受けている。モスクワに行き、ガイダルと出会い、1980年代半ば、市場メカニズムの導入を主張した。1988年ハンガリーで10ヵ月過ごしている(p.97)し、アメリカにも行き、強い影響を受けていた。彼は私有化を徹底的に推進することになる。

ハダルコフスキイはメナテップ銀行グループをリードしたことで知られたが、そもそも計算・帳簿上のループルを現金ループルにすることで、ソビエト経済のスキ間から稼ぎ始めたといってもよかったです。そしてドルとの関係も利用してコンピュータ輸入などでも稼いでいた。

ベレゾフスキイはルシコフを除けばオリガルフスの中では年長（1946年生まれ、p.130）であるが、数物系の博士でオートメーション、コンピュータなどのシンクタンクにいたが、中古車も含む車の輸入でもうけたほか、一時、自動車帝国を築いたといえる位で、車は彼にとり、潜在的富のシンボルであった(p.145)。自分は、ロシアで初めて自動車の「市場」をつくった、と彼はいう(p.149)。

グシンスキイは西側資本を導入する協同組合インフェクス（p.161）やモスト銀行で知られたが、『セヴォドゥニヤ（今日）』紙やNTVテレビなどもはじめた。

以上、第1部、オリガルフス6人の登場である⁽⁴⁾。

第2部のはじめは、彼らはゴルバチョフと異なり、ソビエト体制を救おうとはせず、むしろそれを「埋葬する」人々だったこと、から始められて

いる。もっとも、エリツィン大統領の下で最初の首相を務め、市場移行のショック療法を実行したガイダルにしても、これと協力したチュバイスにしても、はじめのうちは漸進主義者であった（p. 178）。が、ガイダルは国家の統制から価格を自由化し、チュバイスは国家の独占的所有を打碎いて産業的富を私有化するという重要な仕事に急で、市場の基本的な制度を先ず創るということなしにこれらを実行したので「危険な真空」を残すことになった（p. 179）。塩原俊彦氏も紹介しているように、リングやルールより先にボクサーをつくることになった（p. 180）というわけである。しかし、チュバイスの信念は堅かった。国家から経済を解放せねばならぬ、巨大で、広がっていて、官僚的で、荒廃した、非効率的なおそろしい鎖をふり捨てねばならない（p. 185）。彼こそは、私有化小切手を熱心に推進した人物であるが⁽⁵⁾、私有化があるてど推進された頃のある会話の中で、彼は「私は権力を私有化したのだ。共産主義体制を始末したのだ。」といったという（p. 208）。彼はその過程での不正や不公平等々を余り意に介さなかった（第8章）。

私有化小切手をめぐっても、長年のソビエト時代およそ「投資」の経験もなく、小切手・手形・株式など見たこともなかった（それらは禁じられていた）民衆が悪徳金融業者に大規模にだまされるといったことが起った。スマレン斯基ー、ホドロフスキー、グシンスキー、ベレゾフスキーといったオリガルフスは、大小の銀行をもち、外貨も含めたお金の取扱い・取引を操ることで、ロシア再資本主義化の「真空」の中で巨富を築いたともいえるのである。ただ、この真空には、ギャングや腐敗政治家、もとKGBボス等々の悪の力も押しよせたのである（p. 234）。銀行家たちも事実上の私兵で身を護らねばならなかった（第9章）。

混沌の中にも貨幣が支配する市場経済にロシアも移ってくるが、「モスクワの再建者」ルシコフの場合は少し異っていた。ナポレオン戦争の勝利を記念し、1839年から44年間かけて建てられた「救世主キリスト教会堂」は、帝政ロシア時代首都の中心クレムリンのそばにあり、ほとんど市内のどこからも見えていた巨大な建物であったという。1931年スターリンはロシア正教会の抹殺の象徴としてもこれを爆破し、その後、そこは第2次大戦後、プールになったりしていた。ペレストロイカ期に始った信徒による小さな復興運動は、1994年2月からルシコフの下で行政も関係し本格化し、1997年のモスクワ市制850年祭を目標に再建された。ルシコフは多くの正教復興を支持する民衆の献金とともにオリガルフスを含めたニューリッチの多額の献金や献品を集めて、爆破前とほとんど同じ形の救世主キリスト教会堂の再建に成功したのであった。ルシコフは、1996年89.6%，1999年70%の得票でモスクワ市長に選出された。著者ホフマンは、このルシコフ流の私利と公利を上手に混合し、権力と貨幣を混合し、ボス支配の市政機構を作ったこのルシコフの「モスクワ帝国」を、「ガイダル=チュバイスの自由主義」、「オリガルフスの強欲・勝者全取りの資本主義」の2つとは異なる第3のタイプの資本主義化の路ととらえている⁽⁶⁾。著者は新ロシアの資本主義は、こうしたいくつかのタイプの資本主義の混合体と見ていいるのである。むろん、これらは穏やかに共存しているとはかぎらなかった。ルシコフの反対を押し切ってチュバイスが私有化を進める、といった場面などもあった（p. 248）（第10章）。

ソ連邦崩壊後3-4年後の（1994年9月～1995年秋）オリガルフスの何人かも含めて、モスクワ大学近くの「雀の丘」に集っていた人々が居た。ホドロフスキー30歳、スマレン斯基ー39歳、ベ

レゾフスキイ 47 歳で最年長、他にもボイコ 30 歳等々で、彼らの間にも利害の鋭い対立もあったが、ロシア再資本主義化の核がここにあったともいえよう。テレビなどで影響力をもっていたグシンスキイは、1994 年 12 月からのチェチェン戦争報道が反政府的だとして嫌われ、ロンドンに逃れ、半年もそこに住んだりした（p. 293）（第 11 章）。

「富と権力の抱擁」（第 12 章）は、オリガルフスや同類の人々（例えばボタニンに詳しい）が、どのように国家権力と結び付いたりしながら、それぞれの事業を伸ばしていくか、また権力の方もこれら「大君」をどう利用しようとしたか、がいろいろ具体的に述べられていく。権力の側に立つチュバイスも、国家財政からの資金が必要である（p. 317）。だが、チェチェン戦争が泥沼化する中で 4 年間の私有化政策で民衆の憎しみの的となつてもいたチュバイスを、エリツィンは、1996 年 1 月 16 日副首相の地位から外してしまう（第 12 章）。

しかし、エリツィンの支持率もひどく落ちていた。そして、これにとって代りうるのはジュガノフ（共産党）であった。1996 年 2 月のスイスでの世界経済フォーラムで、やさしく、民主主義も尊重するというジュガノフが登場したときに、そこに居合わせたオリガルフスの面々は危機を感じ——共産主義者が権力にもどろうとしている、彼らは先ず“自由報道”を禁じるだろう、彼はわれわれとロシアに危険である——、再び結束する。オリガルフス（そのときは、ボタニンら「7 人の侍」）はチュバイスをエリツィン再選の選挙参謀に押し立てる（p. 328）。エリツィン自身健康問題なども抱えていたが、娘のタチヤーナも積極的に協力し、3~5% にも落ちていた人気の挽回策がとられていく。熱く長いエリツィンの大統領再選に向けての選挙戦。何としてもコムニストの権力

復帰を阻止せねばならぬとオリガルフスは決意している（p. 335）。人気のないチェチェン戦争の終結も、この文脈の中で出てくる（1996 年 4 月 2 日宣言）。大統領選挙そのものを 2 年ほど延ばすという策謀もあったが、これにはチュバイスも猛反対した（p. 340）。エリツィンもがんばって 4 カ月で 24 都市を巡ったりした。支持率は 4 月にはジュガノフに追いついて来て、コムニストが戻れば全部だめになると感じたジャーナリストたちの相当な支援もあり、大統領選挙第 1 回で 35.28%（ジュガノフ 32.03, レベジ 14.52）に漕ぎ着けていた。この過程でオリガルフスがさぞ金を出したろうと思われるが、じっさいは国の金がむしろ彼らの方に流れたと見られているのである（p. 348）。肝心のエリツィンの心臓発作なども隠されながら、1996 年 7 月 3 日の決選投票ではエリツィンは 53.82% で、40.31% のジュガノフを破った、第 3 位 レベジと結んだのである。チュバイスは記者会見で、「ロシアの共産主義後の道は取り消されない、ロシアの民主主義も、私有も市場改革も取り消されない」と述べた（p. 358）。そしてそれまでは大衆の目にはほとんど見えなかった「雀の丘」の人々はもはやその地位と野心とを隠すことができなかった。「7 人の侍」・「大君」たちは、ロシア経済の 50% を支配すると豪語するキングメーカーであった（p. 358-359）。レベジは再選エリツィン大統領府のもとで、チェチェン和平を担当したが（1996 年 8 月ハサブユルト和平）、10 月 17 日にはもう政権から切られてしまった（第 13 章）。

当選したエリツィンは心臓手術などあり、ロシア政治は停滞期に入る。入札などでゲームのルールに従わせようとするチュバイスと実力をふりまわすオリガルフスの衝突。これにはメディア支配もからんで乱戦が続いた。例のヘッジファンドの

ソロスさえもからんでいた (p. 377)。オリガルフス自身も、エリツィン当選後は、かえって分裂を強め、反目しあったりする。特にチュバイスとベレゾフスキイの関係がまたも悪化していく (第14章)。

グシンスキイはテレビ等メディア、スマレンスキイは銀行、ホドロフスキイは石油、ベレゾフスキイがこれらのコーチといったような布陣も固まるかに思われた。そして、大統領の後継者問題が早くも出てくるが、セルノミルジンは先ず外される。だがその間にもすでに 300-400 億ドルも流通していたというドルと、ルーブルとの関係の危機が迫っていた。チュバイスが、インフレは納まってきて通貨が安定してきた、と誇っているちょうどその頃にも、国の負債は急増し、ルーブル切下げへの圧力が加わっていたのである (p. 410-411)。1998 年のロシア経済の実態はまだまだ悲惨な状況にあった。しかも外国資本に対し無防備に金融市場も開いたから、高利回りの国債の多くが外国にあった (1998 年春, 28%, p. 414)。チュバイスの 7 月半ばの IMF からの緊急貸付け 226 億ドルの獲得 (p. 426) も空しく、1998 年 8 月半ばルーブルは切下げ、国債の支払停止 (デフォルト) が不可避となった。「大君」たちの手元の国債もただの紙切れと化してしまったのである (p. 433)。1998 年 8 月 17 日、ルーブル切下げ、デフォルト、モラトリアムが宣言された。民衆、中産階級そして年金生活者が「地の底」に落とされるが、「大君」たちの銀行も破産に瀕していった (第15 章)。

何としても共産主義には回帰させまいとして、1996 年エリツィン大統領再選に結束したオリガルフスも、再選後の混戦に加えて 1998 年のこの経済危機で強烈な打撃を受けた。キングメーカー

を誇ってわずか 2 年でオリガルフスの「わが世の春」も終ったのである。この経済危機は、1997 年央にアジアを襲った「通貨危機」の延長上にあった同質のものといえるが、ソ連邦が崩壊し、世界経済が再統合化し、ロシア経済もそのグローバル化の波に完全に翻弄されることになった証拠でもあった。

さて本書は最後の第 16 章を残している。オリガルフスが、破産の中でどう対応していったかということもあるが、ここでは、エリツィンの後継者問題に絞ると、プリマコフ、シェパシンは次々に首相を外され、ついに 1999 年 8 月 10 日ヴラジーミル・プーチンが指名される (p. 463)。ルシコフ=プリマコフ連合がこれに対抗する。ここで激発したのが、モスクワも含むロシアのいくつかの大都市での連続住宅爆破である (p. 465)。新首相プーチンは、即座にこれをチェチェンゲリラの仕業と断じ、空爆をもって第 2 次チェチェン戦争に乗り出し、その酷烈非情な戦争遂行で人々とロシア人の人気をかちとっていく。

評者はちょうど 1999 年 9 月モスクワに滞在していたので、この間のロシアの雰囲気の一端にふれていたが、エリツィン=プーチン側の謀略説も流れていた⁽⁷⁾。それでこの点に関する本書著者の見解に強い関心があったが、本文ではなく注解で (p. 541, No. 39) チェチェンとコネの強かった〔今もそう見られている〕ベレゾフスキイは、1999 年 5-6 月頃にチェチェン指導部が戦闘部隊を抑えにくくなっているとクレムリン (大統領府) に忠告したこと、また彼は、2000 年 9 月の『ワシントンポスト』のインタビューで、連続住宅爆破はチェチェン人の仕業だと思っていたが、そのことをだんだん疑うようになった、と述べたことを記している。したがって、直接ロシア保安部が爆薬を仕掛けなかったにしても、テロの計画を察

知しながら阻止しないという形で「やらせ」た可能性が示唆されているともいえる。いずれにしろ、本著者も本文で続いているように、ルシコフ執政下のモスクワは恐怖におそれわれ、ルシコフの名声はプリマコフのそれとともに飛び散り、彼自身、「私は大統領選挙には出ない、出ない」と公の場で繰り返し発言する状況となつたのである。

プーチンが東ドイツで KGB のスパイとして働いていた 5 年間は、ちょうどモスクワでの政治・経済の激動、民主化運動高揚の時期であった (p. 474)。それを全く体験していないプーチンは、チェチェン問題などでも、大統領に批判をかくさないグシンスキーを憎み (p. 475)，経済問題にかこつけて彼を逮捕したりし、けっきょくは事実上、彼を国外（スペイン）に追放したのである (p. 483)。2000 年 7 月 26 日に彼は出国する。2002 年 10 月下旬のモスクワ劇場占拠事件などでも強いメディア規制があったことはよく知られているが、プーチンの登場は保安部を含むソビエト時代に伝統的な「力の政治」への回帰であった (p. 480)。「ジャーナリスト、ビジネスマン、ユダヤ人」は警戒される。「オリガルフス」も分割され、支配されていく。メディア自体の名前は残っていても、どんどん人事面からの支配（政治の介入）が進んでいく。「夢の時代は終った。」(p. 485)

オリガルフスの中では、年長のベレゾフスキイは、プーチンを支持した側であるが、チェチェンとの対話か戦争かでは意見が分れ、地方の大統領代理人に指名された 7 人中 5 人がもと KGB や軍人、ということでも両者の関係は冷たくなった。2000 年 7 月、ベレゾフスキイは国會議員〔わずか 6 カ月だった〕を辞した、ロシアの崩壊と権威主義の確立に参加しない、と (p. 487)。「彼らの栄光の日々は終った。新しい演技者が来て、新しい運命が作られていく。そして、新しいロシアの

指導者がクレムリンに坐った。プーチンは言った『あなたも私に大統領になれと要請した 1 人でしょう。何を文句があるのですか？』ベレゾフスキイには答えがなかった。」(p. 489)（第 16 章）⁽⁸⁾

例えば 1998 年の経済危機の「背景」を述べるところで、現金がかなり消えて、大企業が取引の 73% も現物で行っていて、税も 8% しか現金で支払われていないと述べ (p. 411)，その意味についてそれ以上の詳しい研究・言及⁽⁹⁾が見られない、といったような不満が皆無ではない。が、1995～2001 年というポストコムニズム期のロシアに通信員として滞在し、じつによく取材して、オリガルフスと大統領府の両方をダイナミズムに於てとらえている本書は大変優れた作品である。それにしても大統領府とオリガルフスの関係、オリガルフス内の闘い、反共産主義での結束とエリツィン再選の成功、経済危機でのオリガルフスの苦境、権威主義的プーチンの登場、と進行したドラマのシナリオは人間が書いたものとも思えないが、その全体的躍動のドラマを見事にとらえたものとして、本書は推奨に値する。

（Public Affairs New York, 2002.)

注

- (1) 本書を推薦して下さった塩原俊彦氏には、「ロシア新興財閥の『現実』」(『ロシア東欧貿易調査月報』2002 年 3 月号) もある。本書はそこでかなり詳しく紹介されているので、塩原氏の沢山の論文とともにそれも参照してほしい。また、短いとはいえ、同氏「オリガルヒー」の暗躍、ベレゾフスキイとボターニン、が『現代ロシアを知るために 55 章』(明石書店, 2002.6) にある。塩原氏の新しい作品には『ロシアの軍需産業』(岩波新書) が準備中と聞く。
- (2)拙著『ロシア 摳似資本主義の構造』岩波書店, 1993. 拙稿「ロシア 摳似資本主義」の I (明治

- 学院大学『経済研究』第 113 号, 1998.2), II (同第 115 号, 1999.7), III (同第 120 号, 2001.2)。辻 義昌・上垣 彰・栖原 学・中山弘正『現代ロシア経済論』岩波書店, 2001. など。
- (3) 大津定美編著『経済システムと企業構造』ミネルヴァ書房, 1990. など。
- 比較経済体制学会は、その第 41 回全国大会(2001 年 5 月 31 日~6 月 2 日於北海道大学)で共通論題を「移行経済の諸類型」とした。そこでは、ロシア、中央アジアなどの移行経済の問題がじつに多角的に論じられていた。『比較経済体制学会年報』第 39 卷, 2002 年 3 月を参照されたい。
- (4) 註(1)の塩原俊彦稿では、この 6 人各人に關して、本書第 2 部の展開部での内容も含めて、要領よく一覧表にまとめられている。
- (5) 私有化小切手という市場移行の一施策は、チェコが最初とされている。1993 年 10 月のエリツィンによる議会砲撃さわぎのときも、巨額価格の小切手の攻防もあったらしい (p. 206)。
- (6) 本書, 244 頁。なお、救世主キリスト教会堂の再建の問題については、金子えっこ「救世主キリスト大聖堂をめぐる諸問題」四国学院『キリスト教教育研究所 年報』第 9 号, 2003.3. も参考になる。
- (7) 抽稿「ロシア連邦とチェチェン紛争」明治学院大学国際平和研究所『PRIME』第 17 号, 2003.3.
- (8) 2001 年 7 月 18 日、プーチンは記者会見でベレゾフスキーについて聞かれ「それは誰だっけ」ととぼけてみせた (p. 493)。ベレゾフスキーも、2000 年 10 月 26 日出国したが、影響力はなお保っていると見られる。
- (9) 岡田裕之「ロシア移行経済の制度モデル —— 貨幣論的分析」法政大学『経営志林』37 卷 4 号, 38 卷 2 号, 39 卷 2 号の各号などを参照されたい。

(2003.1.12 脱稿)

(2003 年 5 月 6 日経済学会受理)